

遺跡と古墳の宝庫 大麻町 ～縄文時代から古墳時代のお墓についての考察～ 「萩原2号墓・宝幢寺古墳・大谷秋尾谷遺跡」

【班員】岡田、川澤、篠原、富樫、藤川、吉本、古林、黒田、森、松本

1 はじめに(今回の研究について)

昨年度、先輩方が大麻町の貝塚と古墳について研究し、大麻町付近は古代遺跡の宝庫だったことが分かっている。そこで、大麻町内の古墳がどのように生みだされ最終的にどのようにして姿を消したのか、3つの遺跡(萩原2号墓・宝幢寺古墳・大谷秋尾谷遺跡)を比較しながら時代ごとのお墓の特徴と変化を調べた。



2 縄文時代のお墓について

- ・縄文時代のお墓は「屈葬(小さな穴に身体を折り曲げて埋葬する)」にしているものが多く、腕や足を逆に折り曲げたり、亡くなった人の上に大きな岩を載せたりするなど、「霊を恐れていた」ことがうかがえるものもあり、死者を手厚く葬る意識はあまり無かったようである。
- ・縄文時代の墓は、一般的に地面に穴を掘って埋葬したものが多く(土壇墓)。ただ、縄文時代後期前半には、遺体を一度埋葬して、再びその墓を掘って骨を取り出し、土器に入れて再埋葬する特殊な埋葬方法をとったものも多数見つかっている。
- ・大麻町からは貝塚は見つかっているものの、縄文時代のお墓はまだ見つかっていない。

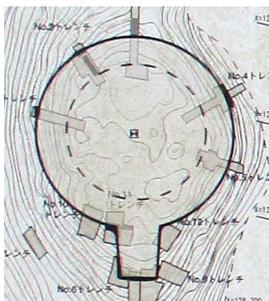
3 弥生時代のお墓について

- ・弥生時代になると体を伸ばして寝かせるような埋葬の仕方(伸展葬)をしたり、その人が大事にしていたもの(副葬品)も一緒に入れてあげたりしているお墓が見つかっている。
- ・九州北部では「甕棺墓(かめかんぼ)」という土器を入れ物(棺)として埋葬したものが多数見つかっている。当時の日本ではこのような大きい焼き物を作るのは難しかったので、大陸に近く、当時の先進技術が伝わりやすい九州北部だからこそ、よく見られる埋葬方法であることがわかる。このように、弥生時代の埋葬は、地域によって特徴が見られる。
- ・徳島県地域では、「石を使ったお墓」が多数見つかっている。これは吉野川南岸で「加工しやすいきれいな緑泥片岩(通称『青石』)」がたくさん採れることが一因なのかもしれない。
- ・なお、弥生時代のお墓からは「矢じりが刺さった人骨」が出土することもあり、当時、争いがあったことがうかがえる。こうした争いを繰り返していくなかで「むら」がまとめられ「くに」がつくられていったのだろう。
- ・弥生時代後期には、こうした「くに」を治める豪族のものと思われるお墓が見つかることがある。こうしたお墓は民衆のお墓よりも大きく、お墓からは豊かな副葬品が出土する。大麻町萩原から見つかっている「萩原2号墓」はまさしくそんな豪族のお墓だと思われる。

3 萩原2号墓について

- ・私たち4班は「萩原2号墓」の見学を行った。当日、講師として鳴門市文化交流推進課の下田先生をお招きし、説明をお願いした。

(1) お墓の形状と大きさ



鳴門市作成「萩原2号墓図」

- 左の図からもわかるように、萩原2号墓は円丘部に四角い突出部がついた形をしている。「前方後円墳」に近い形をした弥生時代の墳丘墓である。
- 大きさは円丘部が直径21.2m、突出部は5.6mある。当時の民衆の墓(宝幢寺にある)と思われるものと比較して、全く規模がちがう大きさであることがわかる。
- 「積石墓(つみいしぼ)」とよばれる石をたくさん積み上げてつくったお墓である。使われている石は大麻町付近で採れる「砂岩」であるが、亡くなった人の遺体を納める石室には「青石」が使用されている。

(2) お墓に葬られている人についての考察

- 副葬品として当時としては「貴重品中の貴重品」ともいえる『舶載内行花文鏡』（中国製）の破片が見つかっている。お墓に葬られている人はこうした貴重品を持つことができるほど裕福な人だったといえる。
- お墓がつくられた場所は、周囲を見晴らすことのできる山の尾根部分である。ここまでわざわざ吉野川南岸で採れた「青石」を大量に運んできたことを考えると、萩原2号墓は、ある程度大きな権力を持った人物が埋葬されていると考えざるをえない。
- 副葬品から、お墓が築かれた年代は邪馬台国が栄えていたであろう時代と推定されるため、この人物は卑弥呼とも何らかの関係があった人物であっても決しておかしくない。
- 萩原2号墓の石室とよく似た構造をもつ大きな前期古墳が奈良県で見つかっている。「ひょっとするとこの人物の子孫が本州に渡り、大和政権で重要な地位を占めたのかも」という想像が班員からも出た。



萩原2号墓見学時の様子

(3) 萩原2号墓と古墳とのちがい

- この問題について考えるために、私たちは学校の隣にある古墳時代前期の前方後円墳である宝幢寺古墳と比べてみることにした。
- 比較してみると、萩原2号墓は宝幢寺古墳の約半分の大きさであり、「古墳というには小さいなあ」という感じがした。
- 「萩原2号墓は前方後円墳の原型ではないのか？」という声も実際にはあるようだが、付近からは「萩原2号墓よりさらに前方後円墳に似た形」をしたお墓（“方”になる部分がもう少し大きいお墓）は見つかっていない。現段階では萩原2号墓を古墳とはよべないのではないかと考えている。



宝幢寺古墳見学の様子

5 大麻町近辺の古墳について

- ・大麻町付近からは宝幢寺古墳以外にも西山谷古墳、天河別神社古墳、大代古墳（大津町）のようにたくさんの古墳が発見されている。前期から中期にかけて古墳は巨大化していくようだが、徳島市内に築かれた渋野丸山古墳（全長105m）のように中期に築かれた古墳は見つかっていない。
- ・「なぜ中期古墳がないのか？」は謎のままである。その理由について班員でいろいろ意見を出し合った（「大麻の豪族は他地域に移住した？」「まだ発見されていないだけ？」etc.）のだが、やはり結論は出なかった。「急に豪族が姿を消す」とは考えにくいだけに、「今後の研究や歴史的発見に期待しよう」ということになった。

6 大谷秋尾谷遺跡から見つかった後期古墳について

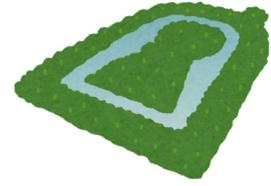
- ・大谷秋尾谷遺跡は堀江公民館の建設中に見つかっている。ここから古墳時代後期の小さい古墳が14基見つかったとのことである。
- ・最も副葬品が多かった9号墓からは枕石や高坏などが見つかっている。また、耳環という銀で作られた装飾品（現在のイヤリング）や勾玉・管玉（首飾り）も発見されている。
- ・これらは弥生時代や古墳時代前期では「高価な貴重品」というイメージが強いが、うかがった話によると、時代とともに生産技術が向上し、装飾品をある程度多く作ることができるようになったとのことである。そのため「村長さん」クラスの人物でも所有することができたようだ。



9号墓の様子（堀江公民館展示）

だんだんと姿を消していく古墳

- ◆ 古墳時代後期になって、古墳は数多くつくられるようになるもののその規模は小型化していく。このことから、地方の有力者たちが自分の墓として、古墳をつくるようになったことがうかがえる。
- ◆ しかし、そのほとんどは円墳で、前方後円墳はあまり見られない。やはり前方後円墳はそれだけ『特別』な古墳であり、前方後円墳に葬られた人は、大和政権と何らかの関係性があった人物なのかもしれない。
- ◆ 日本書紀では、646（大化2）年に「薄葬令（はくそうれい）」が出され古墳を作るのが制限されるようになったと記述されている。天皇の墓でさえ「築造にかかる時間は7日間以内に制限する」と定められたようで、これにより全国から古墳はだんだんと姿を消していくこととなった。
- ◆ この後、日本では仏教文化が栄え、たくさんの寺院が建築されていくこととなる。大麻地域でも、霊山寺・極楽寺・東林院など現代にまで続く“人々の心のよりどころ”となる大切な寺院が建てられていった。人々の古墳築造に対するエネルギーは、寺院建築のための貴重な労力へと変わっていったと考えてもよいのかもしれない。



7 研究を終えて(『班員の寄せ書き』)

- ◎萩原2号墓の大きさを考えると、祀られている人の権力がすごかったことを感じた。
- ◎萩原2号墓に祀られている人が邪馬台国とどんな関係にあったのかを想像すると、歴史が面白く感じた。
- ◎大麻町内の数ある古墳に使われた青石を運んだ船はきっと大きくて頑丈な船だろうと思う。大麻の船をつくる技術はすごかったのかもしれない。
- ◎古墳が朝廷の命令でつくられなくなったと聞いて、時代が変わったんだなと感じた。大麻の古墳をつくる技術も姿を消すんだと思うと少しもったいない気がした。
- ◎この研究は、私たちにとって身近な大麻町の素晴らしさを教えてくれた。古墳について興味を持つことができた。

[余談ですが…]

大麻は古墳や遺跡の宝庫ですが、道路開発などによって多数の貴重な古墳や遺跡も失われたそうです。開発によって私たちの生活は豊かで便利になっていきます。でも、一方で古墳や遺跡がなくなってしまうのは悲しいです。残された今ある文化財を大切にしていこうと思いました。

[MAP]



豆知識

古墳見学をするのなら、冬場がおすすめです。
暖かい季節は、マムシなど危険な生物も
出てきやすい時期ですから注意してください！

